



# 19世紀のパロディ・バラッド詩 (2) : II. Morgan O'Doherty という詩人

著者	宮原 牧子
雑誌名	筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要
号	9
ページ	57-68
発行年	2014-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000275/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000275/</a>

# 19世紀のパロディ・バラッド詩（2）

—II. Morgan O'Doherty という詩人—

宮 原 牧 子

## The Parodic Ballad in the Nineteenth Century (2)

—II. Morgan O'Doherty—

Makiko MIYAHARA

1819年に *Blackwood's Magazine* に掲載された “The Rime of the Auncient Waggonere”（以下、“Auncient Waggonere” と省略）の作者、Morgan O'Doherty という人物の正体については、現在二人の詩人の名前が挙げられている。スコットランドの医師であり、作家・詩人であった David Macbeth Moir (1798-1851) と、アイルランドの作家・詩人であった William Maginn (1793-1842) である。本論では、オドハティの正体をめぐる論争が起こった経緯について考察する。

“Ancient Waggonere” が掲載されたブラックウッズ誌の1819年2月号には、次のような書簡も掲載されていた。

[T]he Eve of St. Jerry, and the Rime of the Auncient Waggonere, were composed by me many years ago. The reader will at once detect the resemblance which they bear to two well-known and justly celebrated pieces of Scott and Coleridge. This resemblance, in justice to myself, is the fruit of their imitation – not of mine. I remember reciting the Eve of St Jerry about the year 1795 to Mr Scott, then a very young man; but as I have not had the pleasure of seeing Mr Coleridge, although I have often wished to do so, and hold his genius in the highest estimation, I am more at a loss to account for the accurate idea he seems to have possessed of my production, unless, indeed, I may have casually dropt a copy of the MS. in some bookseller's shop in Bristol, where he may have found it. Meantime, I remain, Dear Editor, your affectionate servant.

MORGAN ODOHERTY

*Eltrive Lake, Feb. 29th, 1819*<sup>1</sup>

これは明らかなジョークである。この書簡の主がスコットに会ったという1795年、モイアは僅か3歳、マギンにいたってはこの世に誕生さえしていない。ただ、署名のオドハティは、ある実在の人物を想定して書かれたものだと考えられる。彼は Ensign Morgan Odoherty 或いは、Ensign and Ad-

jutant Odohertry と呼ばれたアイルランドの兵士であり、この人物について、ブラックウッズ誌の編集者の一人 Thomas Hamilton は、1818年2月から4月にかけて、つまり“Ancient Waggonere”が発表される一年前に、‘Some Account of the Life and Writings of Ensign and Adjutant Odohertry, Late of the 99th Regiment’ というエッセイを発表している。ハミルトンはその中でオドハティを「大酒呑みで女好きのアイルランド兵」<sup>2</sup>と紹介した。1789年生まれの実在のオドハティは、このエッセイが出された1818年には若くしてすでにこの世にはなかったが、翌年の1819年、John Gibson Lockhart とモイアが、この魅力的なアイルランド人をブラックウッズ誌上に再生させた。つまり、上に引用した編集者宛の書簡は、ロックハートとモイアが二人でオドハティの名をかたって書いたものであり、よって、この書簡と同じ号に掲載された“Ancient Waggonere”の作者は、モイアである可能性が格段に高いと言えるのである。

一方のマギンは、同じく1819年にブラックウッズ誌に寄稿を始めるのだが、マギンと初めて会った William Blackwood (1776-1834) はモイアにあてた手紙で、次のように述べている。

[Maginn] has come over quite on purpose to see me, and, till he introduced himself to me on Monday, I did not know his name, or any thing of him, except by his letters under an assumed signature, like yourself.<sup>3</sup>

引用の ‘like yourself’ から、マギンもまた「オドハティ」というペンネームを使っていたことが分かる。マギンは1818年には既に「オドハティ」というペンネームを使い始めていたと指摘する研究者もいる。<sup>4</sup>つまり、“Ancient Waggonere”の作者オドハティがモイアなのかマギンなのか分からないという後の複雑な状況をつくりだした原因は、二人とも「オドハティ」というペンネームを使っていたという、実に単純なものである。しかも、二人の作者がそれぞれに創り出した詩人オドハティは、ブラックウッズ誌の読者の間で人気を獲得し、その人気はやがて一人歩きをはじめた。

オドハティの名前で数多くの詩や批評がブラックウッズ誌に掲載され、その痛烈かつ豪快な文体は人々を魅了した。そしてオドハティの名前はブラックウッズ誌だけでなく、その他の雑誌にもたびたび登場するようになる。特徴的なものとして、*The Medical Adviser, and Guide to Health and Long Life* (以下、*Medical Adviser* と省略) という定期刊行物の、1824年10月23日、48号、49号、64号を取り上げたい。18世紀末、理想主義的で空想的な医学理論や治療法がブームとなり、19世紀に入ると *The British Medical Journal* や *Edinburgh Medical Journal* といった医学関係の定期刊行物が急激に増えた。1800年には、わずか10種類ほどであった刊行物は、1820年には30種類、1840年には60種類、1890年には120種類ほどにまで増えている。<sup>5</sup>ここで取り上げる *Medical Adviser* は1823年から1825年にかけて、Alexande Barnett という医者が編集し発行した刊行物であり、一週間に一冊ずつ発行され、一冊15ページほどの冊子であった。*Medical Adviser* の創刊理由をとして、編集者は次の4点を挙げている。1、一般の人々に医学的なアドバイスの根拠を示すこと。2、分かりにくい専門用語やくどさを取り除いて、アニマル・エコノミーに関連する科学のあらゆる分野に有益な知識を広めること。3、医師の専門領域内にある世の中のあらゆるできごとを批評するこ

と。4、いんちきな治療を根底から攻撃すること。<sup>6</sup> *Medical Journals and Medical Knowledge* の中でも指摘されている通り、ジャーナルの数が増えれば増えるほど、我こそが本物であるということ売りにするものが増え、却って一般の読者を惑わせる傾向があった。<sup>7</sup> また、理由3に挙げた「アニマル・エコノミー」という言葉は当時ブームとなった言葉であり、これに関連する本は1801年の *An Introduction to the Study of the Animal Economy* をはじめ、1812年の *An Essay on Diet and Regimen*、1821年の *A General System of Toxicology*、1827年の *Observations on Certain Parts of the Animal Economy*、1829年の *Conversations on the Animal Economy*、など次々と出版されている。アニマル・エコノミーとは、動物界の基本的なルールを意味し、動物組織の基本構造や運動の根本機制を解剖学によって解明する学問で、当時ブームであった人間の体の基本構造に関する一般の人々の興味をかきたてる研究分野でもあった。ここで注目すべきは、このアニマル・エコノミーという言葉は、“Ancient Waggoner” のパート3の4連目のグロスにも登場するということである。

（“The bailiffe complainth of considerable derangement of his animal economy”）<sup>8</sup> 当時、話題となっていたアニマル・エコノミーを、おそらくモイアであろうオドハティが敏感にとらえ、作品中に登場させたのであろう。そう考えると、この連につけられたグロスの ‘spleen’ や、パート4の2連目の ‘liver’ という言葉もまた、このような医療ブームにのった表現であったと考えられる。

*Medical Adviser* 48号の表紙は左手にパンチ（ワインやスピリッツに果汁、炭酸水、スパイスなどをまぜた飲み物）の入ったグラスを持ち、向こう側を透かして眺めるご機嫌なオドハティが描かれている。雑誌本編には、‘Milk itself is a valuable remedy in phthisis’ と、肺の消耗と飲み物との関係についての記事が続く。アルコールであるパンチを禁止する内容が続くのである。つまり、オドハティの絵は、本編の記事の前座のような役割を果たしているのである。注目すべきは、ここに登場しているオドハティは、1818年に雑誌に登場して以来すっかり有名になった、酒と女が大好きな実在の人物、アイルランド兵オドハティではなく、ブラックウッズ誌のオドハティであるということであろう。そしてこのオドハティ像にびたりと当てはまるのは、モイアではなく、*The Encyclopaedia of Ireland* がその人となりとして ‘Known as ‘the Doctor,’ he was widely admired for learning and wit and deplored for irregular habits arising from drink’<sup>9</sup> と伝えるマギンであると言えるかもしれない。ちなみに通常の *Medical Adviser* の表紙絵は、人体骨格や内臓といった医学に直結するものばかりであり、ある特定の人物が描かれることは極めて稀である。

次の49号に登場したオドハティは、不機嫌極まりない表情を見せる。理由は、絵の下に付けられた ‘Paying the Reckoning’ に明らかである。記事は前号と同じく、禁酒の薦めであるが、その理



由が表紙絵では、つけを払うのが大変だからという現実的なジョークになっている。

翌年の1825年2月の64号には、2ページにわたって“Sir Morgan O'Doherty's Patient”という小話が掲載されている。飲んでも飲んでも喉が渴いて仕方がないという患者に、いったい今までの主治医は誰であったのかと問いただす医者に対して、患者はしゃっくり混じりに、‘Yes - a - I have - Sir - a - been treated by - a - Doctor O'Doherty’、すなわち‘Sir Morgan O'Doherty of Black Mag.’であると答える。ブラックウッズ誌のオドハティであると明言されているのである。患者はオドハティ医師との出会いについて、‘I was introduced to Doctor O'Doherty by my friend, the poetical Hogg, at Mr. Ambrose's, who told me that he was a most excellent physician for my complaint, which then was inordinate appetite.’と語る。‘Mr. Ambrose’とは、ブラックウッズ誌上に1824年から35年

にかけて連載されていた複数の著者による対話形式の読みもの、“Noctes Ambrosian”（「アンブローズ夜話」）を土台にしていると考えられる。架空の酒場アンブローズ亭で交わされる会話の著者は複数で、その中には John Wilson（‘Christopher North’）、James Hogg、ロックハート、そしてマギンがいた。マギンはこの「アンブローズ夜話」の中で、オドハティのペンネームを使っていることから、*Medical Adviser*内のオドハティは、ますますマギンに近いと言える。モイアの方は本当の医師であったにも拘らず、である。

このように、オドハティの正体が判然としないまま、その知名度が先走っていったのであるが、実はブラックウッズ誌には1819年6月、つまり“Ancient Waggonere”発表の四カ月後には、この作品はモイアが書いたものであることが既に発表されていた。

David Macbeth Moir had already drawn on some elements of the poem for his Coleridgean parody ‘The Rime of the Ancient Waggonere’, in February 1819 (see Volume 1, pp. 86-90), which featured a bibulous waggoner whose pugilistic tendencies got him into trouble with the law.<sup>10</sup>

この明確な記述を無視させる程オドハティの正体をめぐる議論を混迷させた、後のスコットランドとアイルランドの研究者たちの記述の曖昧さである。*Blackwood's Magazine, 1817-25*の編集者は‘unsolicited’な寄稿者、つまり「頼まれてもいないのに雑誌に寄稿してくる者」の代表格として、モイアとマギンの名前を挙げているが、しかし、二人の評価には雲泥の差がある。マギンを‘Maginn provided a fresh burst of energy that helped sustain Blackwood's reputation for caustic wit, unabashed chauvinism and devil-may-care tomfoolery.’<sup>11</sup>と、嘲笑するかのように紹介する一方で、モ



イアについては、[Moir] in 1819, at the age of twenty-one, gained instant admittance to the *Blackwood's* fraternity with the submission of two clever literary parodies, the Scott-inspired 'Eve of St Jerry' and the Coleridgean "Rime of the Auncient Waggonere".<sup>12</sup> と紹介している。さらには、'Moir was a Romantic at heart and was much more comfortable imitating the Lake Poets than satirizing them'<sup>13</sup> と述べ、モイアがロマン派の詩のパロディを書くことができた素質についても仄めかし、'the Scottish Enlightenment' の最終段階に誕生したブラックウッズ誌を根底から支えたと高く評価している。<sup>14</sup>

しかし、19世紀中にアイルランドで出版された研究書は、ほぼオドハティ＝マギン説を支持するものばかりである。確かに、"Auncient Waggonere" がマギン作品であるということを簡単に切り捨ててしまうには、作品中に見られるアイルランド詩的要素が気にかかる。例えば、御者が牢屋に入るというエピソードについては、かつてアイルランドにおいて、数多くのバラッドが獄中の人間によって書かれ、外に投げ出されたもの、いわゆる「死刑囚のうた」が巷の人気を博したという事情を思い起こさせる。また、韻についても、下の引用で確認できるように、アイルランド詩に特徴的な中間韻（行の中間の単語と行末の単語で韻を踏む韻律法）が度々用いられている。（下線は著者による。）

"The nighte was darke, like Noe's arke,  
Oure waggone moved alonge;  
The hail pour'd faste, loude roared the blaste,  
Yet stille we moved alonge;  
And sung in chorus, 'Cease loud Borus,'  
A very charminge songe. (Part 1, st. 6)

1844年の *Dublin's University Magazine* はマギンとオドハティを別人と捉えたもので、アイルランドで出版されたものの中では珍しい。

The real character of the man, so different from the fanciful pictures drawn of him by those who had never seen him, often led people into amusing mistakes, at which Maginn himself was the first to laugh . . . [Maginn] wondered what he should say, or how look, in the presence of the celebrated Sir Morgan O'Doherty, whose prowess was acknowledged, not only in the highest walks of literature, but also in the field of honour and of blood.<sup>15</sup>

この紹介で面白いのは、一般に伝えられているマギンの酒好きな人物像に異議をさしはさんでいるという点であろう。1853年の *The Irish Quarterly Review* でもオドハティ＝モイア説を支持している。ここで注目を引くのは、オドハティ＝モイア説を認め、モイアの詩の面白さを称えながらも、'[Moir] is, in our mind, humorous as Maginn.'<sup>16</sup> とわざわざマギンの名前を出していることである

う。1857年の *The Fraserian Papers of the Late William Maginn* は、その後長いあいだオドハティ = マギン説を定着させることになる。著者 Shelton Mackenzie はアイルランド人であり、同じくアイルランド詩人であるマギンの伝記を著すに当たり、オドハティの名でこの世に出された作品、エッセイ等を ‘O’Doherty Papers’ の名の元に纏めているが、この中に “Ancient Waggonere” を収録しているのである。マッケンジーはモイアもまたオドハティのペンネームを使っていたことについてもこの本の中で触れており、かなり確信犯的にこの詩作をマギンの功績としたのではないかという疑念さえ浮かぶ。マッケンジーは、1818年に “Ancient Waggonere” が発表される一年まえから、マギンがオドハティのペンネームをつかっていたと指摘し、ブラックウッズに匿名で掲載された作品までもマギンの功績に仕立て上げた。

マッケンジーの影響をうけた19世紀後半は、いずれもオドハティ = マギン説を支持している。1863年出版の *The Scottish Nation; or the Surnames, Families, Literature, Honours, and Biographical History of the People of Scotland* だけは、次のように記述している。

[T]his was not the only humorous piece which the Magazine received from his [Moir’s] pen. Among his other jocose papers furnished to that periodical were ‘The Eve of St. Jerry,’ ‘The Ancient Waggonere,’ ‘Billy Routing,’ &c. some of which were ascribed to Maginn, then also a frequent contributor to its pages.<sup>17</sup>

3行目の ‘some of which’ という表現で、マギン作品の可能性を仄めかしている程度である。しかし20世紀に入ってから、突然オドハティ = モイア説が主流となった。1904年に出版された *Irish Literature* では、マッケンジーが書かなかったマギンにとって不利な伝記までも明確に記されている。

One day [Maginn] presented himself at the office of the magazine and desired in a broad Irish brogue to see Mr. Blackwood. “On being closeted together,” writes Dr. Moir, “Mr. Blackwood thought to himself, as he afterward informed me, “Here at last is one of the wild Irishmen, and come for no good purpose, doubtless.”<sup>18</sup>

2006年出版の *Cambridge History of Irish Literature* においては、‘Maginn’s poetry brilliantly mocks Romantic literary values.’ と、作品名には言及していない。

このように、オドハティが誰なのかという、もともとは単純な問題をここまで複雑にしてしまったのは、二人が同じペンネームを使っていたという事情、またオドハティ人気が一人歩きしてしまったという事情もさることながら、その後の批評家、伝記作家たちによる特にアイルランドとスコットランドとの間の手柄の取り合いともいえるべき、情報の錯綜が理由として挙げられる。『アイルランド文学史』が指摘しているように、「ながいあいだに惰性化されたイギリス偏重の風潮のおかげで、十九世紀が近づくとともにアイルランド人の心には、祖国愛に根ざした国民感情がおもむろにはぐ

くまればじめていた。」<sup>19</sup> という事情がその背景にあると考えるのは勘ぐり過ぎであろうか。

## 注

本論は、日本カレドニア学会2010年度第2回研究会における発表原稿の一部に加筆・訂正したものである。「19世紀のパロディ・バラッド詩(2)―I. “The Rime of the Ancient Waggoner”―」は、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要第8号(2013)に掲載。

- 1 Nicholas Mason, gen. ed., *Blackwood's Magazine, 1817-25: Selections from Maga's Infancy* (London, 2006), vol. 1, 78.
- 2 Cf. *Blackwood's Magazine, 1817-25*.
- 3 R. Shelton Mackenzie, *The Fraserian Papers of the Late William Maginn, LL. D. Annotated, with a Life of the Author* (1857) xxxii. <<http://books.google.co.jp/books?id=gbGLZ56Fnw8C&pg>>
- 4 Cf. *The Fraserian Papers*.
- 5 Cf. W. F. Bynum, et al, eds., *Medical Journals and Medical Knowledge: Historical Essays* (London, 1992).
- 6 Alex Burnett, ed., *The Medical Adviser, and Guide to Health and Long Life* (1824) vol. 1. <<http://books.google.co.jp/books?id=ruYEAAAQAQAJ&pg>> 以下、同誌からの引用は画像も含め、全てこの版に拠る。
- 7 Cf. *Medical Journals and Medical Knowledge: Historical Essays*. <<http://books.google.co.jp/books?id=ztsNAAAAQAQAJ&printsec>>
- 8 以下、“Ancient Waggoner”からの引用は、全て *Blackwood's Magazine, 1817-25*: に拠る。
- 9 Brian Lalor, ed., *The Encyclopaedia of Ireland*. (Dublin, 2003) 684.
- 10 *Blackwood's Magazine, 1817-25*, vol 5, 301.
- 11 *Blackwood's Magazine, 1817-25*, vol 1, . xxx.
- 12 *Blackwood's Magazine, 1817-25*, vol 1, . xxx.
- 13 *Blackwood's Magazine, 1817-25*, vol 1, . xxx.
- 14 Cf. *Blackwood's Magazine, 1817-25*.
- 15 anon., *The Dublin University Magazine. Vol. XXIII. January to June, 1844* (Dublin) 77. <<http://books.google.co.jp/books?id=WB-b89QOG-cC&pg>>
- 16 W. B. Kelly, ed., *The Irish Quarterly Review* (Dublin, 1853) vol. 3, 419. <<http://books.google.co.jp/books?id=v4sEAAAQAQAJ&pg>>
- 17 William Anderson, *The Scottish Nation; or the Surnames Families, Literature, Honours, and Biographical History of the People of Scotland* (London, 1863) vol. 3, 173. <<http://books.google.co.jp/books?id=3rQEAAAIAAJ&pg>>
- 18 Justin McCarthy, *Irish Literature* (1904) vol. VI, 2300. <<http://books.google.co.jp/books?id=yqPCO-YxKTMC&pg>>
- 19 尾島庄太郎、鈴木弘 『アイルランド文学史』 東京 1977、41。



## 3 老御者行（試訳）

## 全四部

## 第一曲

老御者は婚礼の祝宴に新郎の  
付添い役としてスリッパ投げ  
に加わるべく招かれたる仕立  
屋を呼びとどむ。  
御者はただ喋りたき心にて仕  
立屋の心裏をば無視しける。

老いたる荷馬車の御者  
九人の中の一人をとどむ  
「その角ばりし拳をもて  
今いかなればわれをとどむる

「花罨の戸は廣く開かれ  
我を待ちぬ  
暇申し候らへば  
汝と談ずる暇はなし」

5

仕立屋、悪寒に襲る。

角ばりし拳もて若者とらへ  
御者は言ひけり 「荷馬車ありしか」  
「放せ 薄汚き田舎者」  
忽ち彼は手をおろしたり

10

仕立屋は三歳半の児のごとく  
耳を傾く。

仕立屋は石に腰かけ  
恐ろしさに痛ましき顔して  
足元怪しき老御者は  
赤き鼻もて話しつづけぬ

15

仕立屋はキャベツのほかに  
食欲をそそられし。

「満杯の荷馬車を馬が曳き  
我ら楽しく遠くさかりぬ  
橋の上を 街道を  
我思ふ 楽しき輩と」  
仕立屋はキャベツ鍋の  
にはひをかぎて胸を打つ

20

御者は北風に向かひて話しす  
るが、通じぬものなり。

「闇夜をすすむ我らが荷馬車は  
さながらノアの箱舟のやう  
雹が吹きつけ 突風唸り  
たへず先へ我らは走り  
声合はせ歌う 『北風よ止め  
魅惑の歌なり

25

浮かれ騒ぎに水が差されぬ。

「『天晴れ也 天晴れ也』と我は叫び  
その声に我らが意気は高まりぬ

30

しかれどその時 我らが聞きしは  
馬の脚の氷の上で滑る音

乗客たちは楽しげに泳ぎの技  
を競ひけり。食糧もまたしか  
り。すなはち大嵩の冷たき  
ローストビーフ。ビーフス  
テーキパイ。ウイスキー四パ  
イント。

「ここにも氷 かしこも氷  
恐ろしく凄き景色なり  
輩ともがらの一人 また一人  
水の中にてのたうつ様は

35

「狂騒の中我らは岸に着き  
ただの一命も失はれず  
川中に永遠に失はれたるは  
我らが肉と酒ばかりなり

40

御者は奇抜なる挨拶にて鶯鳥  
を称へたり。

「終つひに美味うまさふな一羽がの鶯鳥ちやふ  
雪の間を飛び来たり  
我は鞭の柄を叩き  
御名においてぞ鳥を迎へぬ

「鶯鳥すいじんは酔人のごとくよろめきぬ  
かほどに酷ひどく打ちすへられて  
我らは枯枝おこにて火を熾し  
トーマス・ランチョンがローストせり」

45

仕立屋は立ち去りたく苛立つ  
も、留まるよう無理に説き伏  
されたり。

「止めよ 老いたる荷馬車の御者よ  
我は宴に赴くゆえに」  
御者は仕立屋のコートをとらへ  
強ひて彼を留ませ  
恭しくも話しけり  
僅か四半時の遅れなりと

50

## 第二曲

御者は腹わたの底より太陽を  
欲す。

「深紅ひの太陽は上り来ぬ  
地の果ての縁より現れて  
げに美しき太陽なれや  
比ぶる甲斐のなきほどに

55

乗客は鶯鳥を殺したるとて無  
実の御者を責む。

「『げに楽しきことなれや』  
凶徒のごとき輩ともがら 叫ぶなり  
『げに楽しきことなれや  
囚獄ひとやの中にて臥するのは』  
彼らは曰く  
『嗚呼 鶯鳥殺しは何たる罪人ぞ』

60

時ならず太陽は蝕し、人々は恐怖せり。これにつきてペルファストの暦に記録なし。

「日はまさに暮れむとす  
太陽は地の果てに沈み行く  
見よ 夕日の赤き面の  
房飾りの網を被るがごとくなり

65

様々なる仮説がたてられ、乗客たちは誤ちの結論を導き出せり。

「或る者曰く あれに見ゆるは林檎の木なりと  
実をたわわに実らせし  
或る者曰く そは異国の鳥なり  
或る者曰く そは獣なり  
嗚呼 その実は執達吏  
馬に跨り追躡しけり

70

心地よき音ひとつ聞こえ、その効果を描きたり。

「追手の叫び迫り来れば  
我らが耳に轟きけり  
荷馬車を満たすは慄きと  
驚嘆と躊躇ひばかり

75

乗客たちはみなとんぼ返りせり。

「一人 また一人 乗客どもが  
荷馬車から飛び降りて  
一人 また一人  
どしんと音を立て落ちぬ

80

「時速六マイルの速さにて走る様  
まるで嵐の海の船のごとなり  
はたはたと忙しなく  
彼らが衣は風にはためきぬ

85

御者は執達吏に謹みて  
メンドーサ式の  
本格的な一撃を進呈しけり。

「彼らは一目散に逃げ失せたり  
恐ろしさに逃れたり  
汝の眼差し 何故かくなりや  
我凄まじき一撃にて執達吏を倒したり

90

### 第三曲

「恐ろしきかな 老いたる御者よ  
恐ろしきかな その角ばりし拳  
汝が拳 鷺鳥の血と  
執達吏の血にて汚れたり

仕立屋は肉体の恐怖に襲はれぬ。

「殴られてはたまらない  
その褐色の皮の指節にて」  
立ち上がらむとする仕立屋を  
御者は抑え込むなり

95

- 「臆病者よ 僅かなりとも動かば  
目にも物を見せてくれよふ」 100  
足元怪しき老御者は  
赤き鼻もて話しつづけぬ
- しったつり アニマル・エコノミー  
執達吏、自身の身 体の不  
調を訴へり。 「げに美しき執達吏  
戯れ言にはあらざりや  
折れたるは 両足と 105  
十五本のあばら骨
- 提灯揚げし保安官ら、御者を  
追ふ。 「やがて光去り 夜来りて  
百の提灯煌めきて  
公道を進みぞ来る  
美しきかなと我は思ひぬ 110
- 「『この者なりしか』 或る者叫びぬ  
『赦しがたき罪びとぞ』  
残忍なる拳にて  
罪なき執達吏の鼻へし折りぬ
- 多彩多芸のクライトンを真  
似、二十フィート進む。 「ならず者の戯言など 115  
聞くに堪へぬと  
我 三步と大股一步  
右足繰り出しぬ  
左足 巧みにめり込めり  
男のわき腹に七インチ 120
- 汚き真似をと罵りて、御者は  
意識を失ひぬ。 「荷馬車からセコンド降り立つも  
我ら 一ラウンドももたざれば  
何者か後方より我を殴りて  
我が意識遠のきぬ
- 或る者ヨブの慰め手の役目を  
果たせり。 「意識戻りて聞こえしは 125  
我を心配せし輩の声  
或る者曰く 『この者罪を償へり  
さらなる罰を与ふべし』
- 第四曲
- 御者は賢き言葉を述ぶ。 「いやたのし 自由なりせば  
仕立屋よ さらば別れむ 130  
囚獄より 絞首台の見晴らしこそ  
我にとりては遙かにたのし

御者は看守の脾臓をこそぐりぬ。看守はファンダンゴを踊るがごとく身もだえす。

「看守は我に食事を運べり  
決して忘れるまいぞ  
彼が白目を剥きし様  
我 彼が肝の臓を打ちしとき

135

御者は娑婆の空気を楽しめり。

「彼が命の糸はぷつりと途切れ  
我 再び娑婆に戻りぬ  
人が叫びぬ 『そら 水だ』  
我 通りを走りしときに  
我は祝しぬ 天の大气  
げに妙なるその香り

140

御者は短刀、看守の亡霊に怯えぬ。

「我 再び公道を  
恐怖しつつ歩みたり  
十五歩ごとに  
振り返り  
看守の亡霊の  
我が背後に迫り来ぬやと

145

「見よ 西の波間に  
大いなる太陽が沈む  
さらば別れむ  
十五マイルは逃げねばならぬ

150

御者は仕立屋に別れを告に橋を渡りし折りには。

「もし執達吏ども現れて  
我の行方を訪ねしときは  
あちらの道を示したまへ  
我はこちらへ向かふゆえ」

155

仕立屋に不慮の災厄降りかかれり。これに教訓続きたり。好事家の集ひに集まりし者にこそ心得るが相応しき言葉。このような時刻に橋を渡りし折りには、彼ら心すべしなり。罪なきものに謂れなき罪を着せぬべし。

しかして仕立屋は部屋に駆け込み  
三つ四つもんどり打って  
したたか打って頭を割りて  
もはや二度と喋れぬものなり

160

#### 教訓

これぞ愚かなる男らの運命  
災ひはそこかしこにあり  
御者の話に耳を傾けよ  
悪しき仲間を持ったなら

『コウルリヂ詩選』（斎藤勇・大和資雄訳 岩波文庫 1955年） 参照

（みやらは まきこ：英語学科 准教授）